



こんばんは、鎌田です。今日はお招きいただきありがとうございます。花巻東高校のコーチを始めて20年、昨年高野連から表彰を受けました。仕事は民間会社に勤めています。花巻東高校のOBですが私の時代は花巻商業高校と言いました。その後、谷村学院と統合して現在の花巻東高校となりました。

私が小学校6年生のとき花巻商業高校は甲子園に初出場しました。それに憧れて花巻商業に入ろうと決心して私の野球人生が始まりました。親戚からは進路に不安を持ち、公立高校への進学を進められましたが(岩手県では未だに私学への進学は社会的に負け組みとの認識が高齢者を中心にはびこっています)、自分の意思と決意を持って花巻商業高校に進学しました。同学年の仲間は48人中、8人しか残りませんでした。部内に暴力がはびこり、練習どころではなく、ただただボール拾いの毎日、脱落する仲間を励ましたりする余裕はなく自分の気持ちを維持する事で精一杯でした。先輩の言う事は絶対で、赤点の三冠王みたいな先輩が多数いました。ひとつ上の先輩は6人、私達が8人、14人で大会に望みました。いい所までは勝ち進みますがこんなチームでは絶対優勝はできません。ベスト4がいい所です。この時代4年連続準決勝で敗退という時代でした。

今、はっきり言える事は「暴力は何も生みません」と言う事です。現在の佐々木監督、彼は国土館大学の野球部で私と同じような目にあってきたようです。学校からの命令で監督就任を断り切れず悩んでいました。私が彼の背中を押したのですが、「鎌田さんもコーチとして残って下さい」と依頼されました。礼儀正しい彼ですから、私はOB対策として彼がOBに失礼がないようフォローしました。

当初、佐々木監督は「補強」というものにこだわっていました。「岩手県にも絶対いい子がいる」そんな子どもたちを集めて、「岩手県から日本一のチームを作ろうと誓った」のです。県内の中学校をくまなく巡回して、能力が高い子を発掘していきました。始めは断り続きでさっぱり集まりませんでした。3年は我慢しましょうと、粘り強く活動していきました。佐々木監督は、来てくれた子供たちを誰一人として放り出すことはしませんでした。もちろん現在もそうです。花巻東を卒業した後、進路は必ず確定させて送りだします。地道な活動が少しずつ認められて、特に盛岡市内のリトルシニアのチームから多く送り

込んでもらえるようになりました。野球関係者からは、花巻東じゃなく、盛岡東だと揶揄されたりもしていますが、我が校は全県学区で盛岡以外の子どもの方が圧倒的に多くそんな事はないのです。

花巻東の野球部を強くしたい、日本一のチームを作りたいと行動していたのですが、就任当時から変わらず貫いてきたのは、「出口の充実」です。野球なんていかほどのものでも無い、「野球が終わった後の方が人生には大事」なんだ、という事です。県大会を突破して甲子園が決まった後は、必ず周囲に対しての態度を指導します。口をすっぱくしていい聞かせます。「自慢や大きな態度は厳禁、負けていった多くのチームに敬意を払い代表にさせて貰った」、と言う事を。甲子園に出た事は社会的に何の評価もない、甲子園球児がその後まともな人生を送れなかったのを何人も見ている。一人前の社会人になれる事がどれだけ大事か。社会は同級生や後輩が評価しません。上司が評価するのです。昨年であれば、「私は、雄星について行っただけです」くらいの気持ちでいなさいという事です。

具体的には、髪の色を染めてはいけません、眉を剃ってはいけません、ピアスはだめです、服装の乱れもだめです。実社会では感性を磨き、いま周囲の方々が何を求めているか感じなさいという事を教えています。挨拶は、必ず足を止め、揃えてからしなさい、自然に出来るまで何回も指導を繰り返します。今度雄星がテレビに写ったら彼の挨拶の行動を確かめて下さい。私の話の通りですから。これは、野球をする以前の教育でこれができるから初めていわゆる野球が出来るのです。

監督は、プロになる雄星に変な格好や、行動や、言動をしたらいつでもバットを持って「けつバット」しに行くからな、と宣言しています。花巻東のOBとして先輩も後輩も見ている、解ったなと申しつけております。(けつバットとは、お尻をバットで殴る事です、今はそんな事はしません)

雄星が入って来たとき彼はウェートアップで断トツのピリで、20Kgしか上げられませんでした。それでも投球の急速は140Kmを超えていました。これは今後、体を作って行けば超一流の選手になると確信しましたが、監督は雄星の希望を聞いて、卒業後プロになるのならドラフト1位でなければ大学に行ってもらおうと条件をつけました。

体重を増やす為に1日10杯のどんぶりご飯を食べさせました。胃袋を大きくして食べられる体を作らせました。食トレーニングと言います。胃を壊すくらい辛いトレーニングです。見事にクリアして68Kgの体重が現在84Kgまで増えています。

目標達成のために貪欲なまでに取り組みました。トイレ掃除は1年生のときから、大事なマウンドとトイレはお前に任せると監督が決めました。あれはやらせでもなんでもなく監督の指導方針だったのです。雄星トイレは実話です。また、いろんなジャンルの本を読み、自分で噛み砕き知識や行動に取り入れていました。今度はそれを実践するために考えながら練習をします。漠然と練習するのではなく、今は何を習得するために練習しているのかいつも頭と体が同期しながら練習しているのです。ですからはたからみると練習し過ぎだと思のですが、彼は時間が足りないのでしょうか、納得できないのでしょうか、とんでも無いくらいの練習量でした。夏の選手権では背筋痛で苦しみました。後でわかった事です。肋骨の骨折だったのです。豪腕の肩から繰り出す150Kmの速球は上体のひねりの復元力から生まれるのですが、肋骨がついに悲鳴をあげたのです。人も周囲も気がつかない意外なケガだったのです。

甲子園では、高野連が非常に神経質です。それに慣れるまでまともに試合に入れません。また、指定練習グラウンドは一般の高校のグラウンド(他のクラブが活動している)をあてがわれましたが、今回は企業や市営の専用グラウンドを貰い実績が物を言う事を身にしみて感じました。

選抜大会の話、秋の東北大会の準決勝で敗退した我が校が準優勝した一関学院をさしおいて選抜されたのは、岩手県大会の準決勝で9 - 2のスコア勝ちした事、東北大会の準決勝で光星学園にクロスゲームだった事、決勝の一関学院がワンサイドゲームで負けた事、この三つの要素で花巻東が選抜されました。その後、神宮大会を視察した佐々木監督は優勝した慶応高校の試合を見た後、我が校は選抜で優勝できると確認したといえます。

この話を聞いた子供たちは、ますます練習に励みました。選抜大会で他チームの試合を見学した後、「これで関東の代表なのですか」などと感想を述べていました。日々の練習で培われた自信は緊張して実力を出せず敗退していく田舎チームではなくなっていたのです。快進撃は皆様をご存知の通りです。

私は、絶対優勝できると思っておりましたが、残念ながら準優勝で終わりました。夏の県大会はものすごいプレッシャーとの戦いでした。「勝って当たり前」いまだかつてこのような状況は指導者、もちろん選手は経験していませんから決勝戦、花巻東が勝つだろうと言われましたが、2 - 1の辛勝でした。高校野球の決勝戦、何があるかわかりません、始まる前監督は1点差で勝つぞと子供たちに言い聞かせていました。まさにその通り、7年連続で決勝戦は1点差ゲーム、岩手県のレベルが上がっていたのもあります。それと一発勝負の高校野球ですから絶対なんてことは、それこそ絶対はないという事です。川村キャプテン始め本当に泣いておりました。

実は、春の東北大会の一回戦で公立高校の八戸西高校にあえなく敗退、この敗戦がとてつもない薬になったのです。雄星も必死に投げましたし野手も必死で野球をしました。勝てて本当にほっとしました。責任は果たしたとう実感でしょうか。

大阪の宿舎では、女の子たちが同じ宿を予約して宿泊していて、雄星の部屋の周りをうろろろしているのです。見回りで注意すると「やだ、このおじさん」「チョーむかつく」「このおじさんビミョー」などと訳解らない言葉を発して、なんとか雄星にコンタクトしようとした彼女たちもそれなりに必死なのですね。まさに初めての経験でした。人気が出るとこんなに大変な事だと実感した日々でした。

最後に、私達は、3年以内にまた今年のようなチームを造ると申し合わせて昨年忘年会をしました。花巻東高校には県内の有望な子供たちがたくさん集まっています。今後もまた頑張っていきますのでどうぞ応援してください。

(もりおかクラブ:2010年2月11日例会卓話)